
つよきやらっ！

TAIGA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つよきやつ！

【Nコード】

N5508X

【作者名】

TAIGA

【あらすじ】

ごく普通の高校生『高中 暁斗』の周りには、とんでもないヒロインばかり！

ワガママ放題やりたい放題の姉『高中 由希奈』

誇り高き最強のストーカー『武蔵野 瑠夏』

心優しい孤独な殺気エンジェル『仲川 泉月』

天然ちゃーはん娘『蕪木 奈々』

元気いっぱいハイテンション爆発娘『羽田 水月』

そんな彼女達に日々振り回される暁斗のドタバタ学園ストーリーここに開幕！！

高中姉弟の朝

世の中には理不尽というものがまかり通っているものと、高中
暁斗（たかなか あきと）は常々感じている。

例えば今、暁斗の前に仁王立ちしている姉……高中 由希奈（たかなか ゆきな）がその象徴ではないだろうか。

由希奈は言う。

「暑い！ 蝉煩い！ ちょうどいいわ 暁斗、蝉を殺しに行くならついでにアイス買ってきなさい！」

……確かに今は夏で、朝とはいえ気温は高く、外で大合唱する蝉達の鳴き声もかなりの物だ。

加えて暁斗は外出しようと玄関に向かってはいたが、それは学校に行く為で、決して蝉を虐殺しに行く為ではない。

「あのさ……朝っぱらから何を言ってるの？ 俺が今蝉を殺しに行くように見える？」

暁斗は着ている制服を指で摘むと、呆れ顔で由希奈に問う。

由希奈は腕組みをしながらマジマジと暁斗を眺めると、やや苛ついた様子で口を開いた。

「蝉殺すのに服装なんて関係ないわっ！ 要は心意気。そう、心意気なのっ！！」

……言っている事がめちゃくちゃだ。

暁斗は半分諦めた顔で由希奈を見る。

小柄な身体に腰まで伸びた長い髪、そして童顔で可愛らしい顔付きをしている由希奈は、パツと見た感じでは優しそうな女性といった印象を受ける。

実際、彼女が開業している『高中診療所』ではその見てくれに騙された患者が、彼女目当てに足を運ぶという現象が起こっているのだ。

「とにかくさ……俺は学校に行くんだよ。それに仮にも姉ちゃんは医者だろ？ 医者が殺す殺す言ってるのも問題じゃないの？ 蝉だって一週間しか生きられないんだから簡単に殺しちゃったら可哀想だろ」

暁斗が諭すように言うと、由希奈はいきなり暁斗の目前まで勢いよく詰め寄る。

「なっ!?!」

慌てる暁斗。

そんな暁斗の両肩を掴み、由希奈は真剣な眼差しを向けた。

「……暁斗、よく聞きなさい。世の中は弱肉強食。強い者が勝ち、弱い者は淘汰されるの。分かる？ お姉ちゃんはそれを暁斗に学んで欲しいの。ううん大丈夫！ 例え暁斗が外で狂喜乱舞しながら蝉を虐殺してその骸を貪り喰っていても貴方は私の可愛い弟。お姉ち

「やんは決して見放したりドン引きしたりはしないわ？ だから安心して殺戮の天使になりなさい」

「しねえよっ！！ 何で俺がそんな危険なキャラにならなきゃいけないんだよ！ もういいっ！ 俺は学校に行くからなっ」

支離滅裂な姉を突き飛ばすと、暁斗は玄関の扉へと踵を返す。

「あーもうアツタマ来た！ お姉ちゃん超頭きたっ！！ こうなったら今日きた患者全員に『それは恋の病です』って言ってやるっ！！」

「いや、それはやめとけっ！ 大変な事になるから！ 頼むから診察だけはまともによってくれっ！！」

膨れっ面で暴れる由希奈に慌てて詫びを入れる暁斗。

「……じゃあ帰りにアイス買ってきて。2000円のやつ」

「……はい、よろこんで」

ようやく落ち着いていた姉、由希奈に釈然としない気持ちを押さえながら暁斗は玄関の扉を開ける。

……今日も騒がしい一日になりそうだ。

夏の陽射しに目を細めると、暁斗は学校へ向かってゆっくりと歩き出した。

高中姉弟の朝（後書き）

閲覧ありがとうございます。

この作品は、筆者の執筆時間の関係上一頁あたりの文字数が少なめになっております。

長くすると、いつになったら次話投稿出来るか分からず、万が一にも続きを待っていてくれる読者様（恐らく居ないとは思いますが）がいたら申し訳ないと思い、少ない文字数で分割しながら投稿させて頂きます事を御了承下さい。

武蔵野 瑠夏の朝

早朝五時。

「……九千九百九十八！ 九千九百九十九！ 一万っ！！」

武蔵野 瑠夏（むさしの るか）は日課としている正拳突き一万回を終え、静かに突き出していた拳を下ろした。

その前に三十キロに及ぶランニングをこなしているのだが、瑠夏の呼吸は全く乱れる気配はない。

「さて……朝の鍛錬はこのくらいでいいかな？」

軽くストレッチをしながら、横目で倒れ込んでいる男達見る。

二十人はいるであろう屈強な男達は、すでに息も絶え絶え死屍累々といった状態で、全員横たわっていた。

これは武蔵野流空手道場の庭で毎朝見られる光景で、別段珍しい物でもない。

その中で唯一平然と立っている瑠夏が、溜息混じりで頭を振る。

「全く情けないな。お前達、日頃の鍛錬が足りないんじゃないのか？」

肩で綺麗に切り揃えた髪をかきあげると、やや厳し目の言葉を男達

に投げ掛けた。

すると男達の一人……恐らく武蔵野流道場の門下生なのであろう、鋭い視線で見据える瑠夏に向かって口を開いた。

「し、しかし師範……。流石に三十キロランニングと、前回し蹴り五千回、後ろ回し蹴り五千回、正拳突き一万回のメニューはハード過ぎます！」

そう、この男が言う通り瑠夏は女子高生にして武蔵野流空手道場の師範である。

しかもその強さといったら周囲から『鬼神』と呼ばれる程だが、凜とした真っ直ぐな眼差しと、面倒見の良さから彼女を慕う者も多い。

何より、瑠夏は美人である。

武蔵野 瑠夏の朝2

「それでは私は学校に行かなければならないので自室に戻るとしよう。全員、鍛錬を怠らないように！」

言いながらその場を立ち去る瑠夏。

その、何処までも凜とした後姿に門下生達の誰もが目を奪われた。

生まれてすぐに母親を亡くし、拳聖と呼ばれた父に育てられた瑠夏であったが、その父まで三年前に亡くし、それからというもの若い身空で道場を引つ張ってきたのである。

それだけの物を背おった瑠夏の背中には、計り知れない大きさが感じられた。

「押忍!!!」

門下生達はハードワークの為に動かない体に鞭を打ち、瑠夏に向かって頭を下げた。

「…………ふう」

シャワーを浴び、道場の二階にある自室に戻った瑠夏は部屋に入るなりに深い溜息を漏らす。

「…………あ…………あ」

瑠夏は妙な声を上げながら恍惚とした表情で部屋をぐるりと見渡した。

やがてへたりと力無くその場に座り込む。

「あきとお〜！」

瑠夏の視線の先には、部屋中に貼られた大小様々な暁斗の写真。

無論、全て隠し撮りした物である。

「あきとアキト暁斗おっ！！」

瑠夏はベッドに置かれた、暁斗の姿がプリントされた等身大抱き枕に向かって、勢いよくその身を投げる。

「はあ…………暁斗」

抱き枕に顔を埋めた瑠夏は、ウツトリとした瞳で本日何回目かの『暁斗』を呟く。

「あんな暁斗。今日もるかちゃん朝練頑張ったぞ？えらいぞって頭ナデナデしても良いんだぞ？」

潤んだ瞳で抱き枕に話掛ける瑠夏。

そう、これが鬼神じゃない方の武蔵野瑠夏である。

転校してきた高中曉斗に一目惚れしてしまった瑠夏は、見事にストーカーと化した。

幼い頃から武道しか知らない瑠夏は、その気持ちをどうしたら良いのか検討が付かなかった。

その結果がコレなのである。

「あっ！」

フと時計（曉斗の顔が印刷された特注品）を見た瑠夏が慌ててベッドから飛び起きる。

「もうすぐ曉斗が家を出る時間じゃないか！ こうしてはいられない！——！」

瑠夏は驚く程の速さで制服に着替えると、学校……いや、曉斗の住む高中診療所へと向けて走り出すのであった。

仲川 皐月の朝

仲川 皐月（なかがわ さつき）は、いつもの様に自宅近くの公園へと散歩に来ていた。

手にはビニール袋に入れられた三枚の食パン。

中規模程度の公園には多くの鳩が生息していて、動物好きな皐月は毎朝散歩がてらに鳩達に餌を与えていた。

早朝の公園には犬を散歩させている人達もちらほら見受けられ、その犬を眺めている事も皐月のお気に入りだった。

「ほら、沢山食べてね」

いつものベンチに腰掛けた皐月が食パンを細かく千切ってばら撒くと、どこからともなく鳩達が皐月の周りに群がってくる。

やや茶色がかったセミロングの髪が陽に照らされ、可愛い外見の皐月が鳩達に囲まれている姿はとても絵になっている。

「あれ？」

食パンを千切っていた手を止め、皐月は何かに気が付いたかのように前方に目を向けた。

視線の先には公園の外の道を猛スピードで走っていく武蔵野瑠夏の姿があった。

その後にはやや遅れて道着を着た男達が続く。

瑠夏に比べ、まるでボロボロのゾンビの様だった。

「武蔵野さんだ……」

皐月は深く溜息を吐く。

皐月と瑠夏は同じクラスである。

活発で、誰からも慕われているいわばリーダー気質の瑠夏は、内気な皐月の憧れだった。

「……お友達になってくれないかなあ」

そう呟く皐月には実は友達と呼べる人間が一人もいない。

優しく、他人思いで、性格の良い皐月ではあったが、幼少の頃から友達が出来た試しが一度もなかった。

それは高校に入学してからも変わらず、高校二年になった今でも孤独な毎日を送っているのだ。

「はあ……」

項垂れながら二度目の深い溜息を漏らす皐月。

仲川 皐月の朝2

「……帰る」

手に持った食パンを全てばら撒き終えた皐月が、しょんぼりとしながらベンチから立ち上がる。

その時だった。

「おはようございます」

犬を散歩していた老人が皐月に話し掛けてきた。

老人は毎朝鳩に餌を与えている皐月を犬の散歩中に見ていて、心なしか元気がない皐月を心配して後ろから声を掛けてみたのである。

「……………!!」

その瞬間の事だった。

皐月の身体が大きくビクンと跳ね上がると、途端に硬直し始める。

ギシギシギシッ!!

そんな音が聞こえてきそうなきこちない動きで、徐々に首を老人の方へと向ける皐月。

「お、お、お、おは、おはオハオハ……………」

奇妙な声を上げる臯月の周囲にある大気が震え出した。

バサバサバサツ！！

大気の異常を敏感に感じ取った鳥達が一斉に大空へと飛び立っている。

握り締め過ぎた拳からはポタリポタリと血が滴り落ち、噛み締めた唇の端からも一筋の血が流れ落ちる。

その姿はもうこの世の者とは思えない恐ろしさで、事実声を掛けてくれた老人はとうに腰を抜き、金魚の様に口をパクパクさせていた。

ちなみに連れていた犬は、とっくの昔に逃げたしていた。

そうしている間に、今や夜叉と化した臯月の身体からドス黒いオーラが立ち込めてくる。

それは殺気と良く似ていた。しかも莫大なものである。

「おおお、おはオハツ！ おはようございますっっっ！！！！………
つて、あら？」

ようやく臯月が挨拶を返せた頃には、老人の姿はもうそこに無かった。

それどころか、臯月の半径100mに動く物の姿すら見えなくなっていた。

これが皐月に友達が出来ない理由である。

極度の上がり症、赤面症である皐月は、他人と接した時に緊張のあまり絶大なる殺気を放つ。

それに恐れをなした人々は、皐月に恐怖心を刻まれて近寄らなくなってしまうのだ。

「はぁ……またか」

いつもの結果にガツクリと肩を落とし、皐月は学校の支度をすべくとボトボと家へと帰って行った。

蕪木 奈々の朝

「ふわあっ!？」

叫びと共に勢い良くベットから飛び起きると、蕪木 奈々（かぶらぎ なな）は肩で息をしなから部屋を見渡す。

「夢……か……。良かった……」

額から流れ落ちる汗を手で拭くと、安堵の表情を浮かべた。

酷く恐ろしい夢だった。

奈々は己がみた悪夢を思い返し、あまりの恐ろしさに身震いする。

もし現実に夢でみた様になってしまったのならば、奈々は生きていく自信がない。

奈々は呟く。

「ちゃーはん……」

奈々がみた悪夢とは、この世から全ての炒飯が消えてしまう夢。

そう、蕪木奈々は無類の炒飯好きなのである。

奈々を知る人々は、彼女が炒飯以外を食べている姿を見た事がないと口を揃えて証言する。

すっかり目が覚めてしまった奈々は、もそもそとベットから抜け出すと、机の上に置かれた写真立てを手に取ってニコリと微笑む。

「おはようさんです。　ちゃーはんさん！」

写真立てには出来たての五目炒飯の写真。

無駄に高画質である。

朝の挨拶を済ませた奈々は、部屋を出るとリビングまで移動する。

母が朝食の用意をしているのであろう、キッチンから良い匂いが漂っていた。

「おはようさんです。お母さん」

「おはよう奈々。もうすぐ朝食が出来ますから、椅子に座って待って下さいね」

奈々の母親である朱理（あかり）はにこやかに娘に微笑むと、大火力で中華鍋を振るい始めた。

蕪木 奈々の朝2

「ふおおおっ！ お母さん凄いです！ 炎です！ 炎を完全に従わせていますっ！！」

我が母の鍋捌きを眺めながら、異様に興奮する娘。

「ふふふ…… 大丈夫よ奈々！ 貴女もいつか炎を自由自在に従わせる事が出来るわっ！ だって、貴女は私の娘ですもの！！」

言いながら朱理は一際大きく鍋を振ると、黄金色に輝く……炒飯がキラキラと輝きながら宙に舞う。

そして炒飯は朱理が素早く構えていた皿の上に綺麗に乗った。

「ふおおおっっ！！ お母さんっ！ お母さんっ！！」

奈々のボルテージは最早MAXである。

朱理は朱理で、炒飯が乗った皿を持ったままクルリと回転すると、ビシッとポーズを決めていた。

「さあ召し上がれ」

その後大人しくテーブルの席に着いた奈々の前に、朱理特製五目炒飯が置かれる。

キラキラ輝く炒飯をうっとり眺めていた奈々は、やがて神妙な顔付きに変わり始めた。

「お母さん……」

「ん？ どうしました？」

奈々の対面に腰を下ろした朱理が優しく微笑む。

奈々はもじもじと身体を揺すりながら口を開いた。

「ちゃーはんさんが愛し過ぎて生きていくのが辛いです……。お母さんはそんな事ありませんか？」

「ないから安心しなさい」

「……そうですか」

娘のおかしな質問にも、変わらずの微笑みを絶やさないうる理の返答に、何故かホツとした様子で五目炒飯に箸（蓮華）をつける。

「ふおおっ！ 最高ですっ！！ 完璧です！ あえて言うならば完璧です！」

五目炒飯を一口食べた奈々は大きな瞳をより一層大きく見開くと、歓喜の声を上げた。

「完璧を二回言いましたよ？ それでね、奈々。さっきの質問なんですけど、お母さんの意見を聞いてくれますか？」

「ふぁい？ なんれすか？」

狂喜乱舞しながら五目炒飯を食している奈々に、朱理は飽くまで優しい口調で語り掛ける。

「奈々は言いましたね？　ちゃーはんさんが愛し過ぎて生きるのが辛いと。でもね？　生きていなければ、奈々は炒飯を食べる事が出来なくなってしまうのですよ？」

「ふおっ!？」

瞬間、奈々のバツクに稲妻が走った。

すでに食べ終えた五目炒飯の器に蓮華をおくと、茫然自失といった感じで天を見上げる奈々。

「そうでした……。辛くても生きていなければ、私の全国ちゃーはんさん制覇が成される事はないのでした……」

そんな奈々の様子を見て、朱理はクスリと笑う。

「でしょう？　それならば頑張りなさい！　さあ、そろそろ支度をしないと学校に遅刻してしまいますよ？」

朱理がチヨイチヨイと指で時計を指すと、奈々は慌てて立ち上がった。

「ふおっ！　もうこんな時間ですか!？　流石ちゃーはんさん！　時が経つのも忘れさせます!！」

奈々は朱理にご馳走様をすると、急いで身支度を整え、家を飛び出していった。

羽田 水月の朝

規則正しく時を刻み続ける目覚まし時計の針が、アラーム設定された時刻に近づいていく。

「とっつ！！」

今正にその能力を発揮しようとしていた目覚まし時計にチョップを喰らわし、目覚まし時計の最大の能力であるアラームの発動を阻止する人物がそこにいた。

それはこの部屋の主、部屋にあるのも全てを支配する言わば絶対神、羽田 水月（はだ みつき）である。

「ふふ〜ん！ やってやったですよ？ 毎朝毎朝私を苦しめる目覚ましに、正義の鉄槌を食らわせてやったですよ！」

アラーム設定された時刻を過ぎて、今やただの時計と成り下がった目覚まし時計を眺めながら、水月は不敵に微笑む。

「完全勝利つ！！ 遂につくき目覚まし時計に勝利した水月ちゃんなのであったー！」

両拳を高く突き上げ、勝利の喜びを体全体で表した水月は、そのままの体制でベットへと倒れ込んだ。

「さてさて〜早起きもしてしまっただし、時間に余裕もあるなあ？ どっしょっかなあ？ などと言いつつ、戦いの後の休息をとる水月

ちゃん！」

独りで戯言を呟きながら目を綴じる水月。

彼女の呼吸が寝息へと変化するまでに五秒掛からなかった。

ちなみに、水月は別名『遅刻魔』『カリスマ遅刻師』『呼んでも来ないバハムート』等と呼ばれ、『千の異名を持つ女』の称号を欲している。

完全に夢の彼方へと旅だってしまった水月の至福の時間は、学校の始業時間五分前まで続くのであった。

羽田 水月の朝2

「……………うそ」

夢の世界のミラクル大冒険から帰還した水月は、無情にも現実の時間を告げる目覚まし時計を凝視しながら呟いた。

「うそうそうそうそうそつ！ ヤバイじゃん！超ヤバイじゃんつ！遅刻だよ？ 完全に遅刻だよコレ！！」

あまりの衝撃に気が動転しているのだろう水月は、目覚まし時計を持ったまま立ったり座ったりを繰り返す。

「うぬう……………目覚まし時計め！ あたしに敗北したからといって卑劣なマネを……………！」

100%自分の責任なのだが、その事実を棚に上げながら急いで制服に着替える水月。

「ああもつっ！ 髪ボサボサじゃんっ！」

言いながら慣れた手付きで水月のトレードマークであるポニーテールを完成させると、足早にリビングへと駆け出す。

「ママッ！ どうして起こしてくれなかったの！？ おかげ様であなたの可愛い娘さんが今まさに大ピンチ……………って、アレ？」

リビングに繋がるドアを開けると同時に文句の矢を飛ばした水月の

動きが止まる。

リビング、キッチンには誰の姿も見えないのだ。

「んんん？ 何コレ？」

設置されたテーブルの上に置かれた紙に気が付いた水月は、それを手に取ると、しげしげと眺める。

『水月へ。』

暑いからパパと二人でちよつと旅行に行つてきます。

朝御飯は用意してあるのでチンして食べて

ね！』

「……………」

一通り手紙を読み終えた水月は、無言で手紙の横に置かれていたコーンフレークに視線を移す。

「チンしてって……………どないせえっちゅ〜んじゃ」

見事両親に置き去りにされた水月であったが、自由人である両親のこの行動にはすっかり慣れてしまっている。

「まっいつか！ コーンフレークは世界の朝食」

コーンフレークを器へと移した水月は、鼻歌交じりで冷蔵庫の扉を開いた。

その瞬間、開けた扉を勢いよく閉める。

「牛乳ないじゃんっ!!」

冷蔵庫の中には塩辛の瓶しか入っておらず、水月は怒り心頭である。

「牛乳がないコーンフレークなんて世界にはとても及ばないよっ！
せいぜい世界！ セントラルリーグだよっ!!」

意味不明な言葉を発しながら器に盛られたコーンフレークを指差す水月。

やがてハッと我に還ると、遅刻確定な現実を思い出す。

「わわわっこうしちゃいられないっ！ 行かなきゃ！ 可憐に優雅にダイナミックにっ!!」

水月は喚き散らしながらカバンとコーンフレークを手にとると、大慌てで家を飛び出して行った。

登校風景

「まったく……我が姉ながら困ったもんだな」

家を出た暁斗は頭を掻きながら独り言ちる。

あれで医師が務まるのだから世の中不思議なものだ。

「……ん？」

そんな事を考えていた矢先、何かに気が付いた様子の暁斗が歩みを止めた。

物音がする。

それは高中診療所の横、ゴミ置き場として利用しているスペースから聞こえてきた。

ゴミの回収日までの間一時的に保管しておくそのスペースには、稀に野良犬や鴉等がゴミを漁りに来る事がある。

ガサガサとゴミ袋を漁る様な音から察するに、また動物達が荒らしに来ているのだろう。

「まったく、朝っぱらから勘弁してくれよ。後片付けが大変なんだから！」

暁斗はゴミを漁る動物を追い払うべくゴミ置き場へと向かい始める。

「え？」

ゴミ置き場に近づくとつれ、ガサガサとゴミ袋を漁る音と共に、聞き覚えがある声が耳に入ってきた。暁斗が再びその歩みを止めた。

「……………こんな所にゴミを置いておくなんて仕方がない奴だな。暁斗は！ 私だから良い様なものの、もし変質者がゴミを漁りに来たら一体どうするつもりなんだ！」

そこにはブツブツと文句を言いながらゴミを漁る人物がいた。

武蔵野瑠夏である。

「世の中にはストーカーや変態が山程いるからな！ やはり私が監視して守ってやらねばならないか……。フツッ！ 暁斗め、私がないと何も出来ないんだな？ 可愛い奴め」

ニヤニヤしながらゴミを漁る瑠夏は、完全にただの変質者にしか見えなかった。

その時、瑠夏が一際大きな声を上げた。

「おおっ！ こ、こ、これはっ！ 暁斗の使い古しのトランクスじゃないか！！」

まるでゲームの主人公がお宝アイテムを発見した時の様に、高々と空に掲げて歓喜する瑠夏。

「これは……こんな……どうしよう……し、辛抱たまらんではな
いか……！」

迷わず瑠夏はトランク스에顔を埋め始める。

「……武蔵野？」

「……あ」

我慢も限界にきた暁斗が引き攣りながら声を掛けると、驚いた表情
の瑠夏が振り返る。

登校風景2

暫しの沈黙の後、瑠夏は静かに立ち上がると、制服のスカートに付着した埃を手で払いながらニコリと微笑む。

「おはよう暁斗。偶然だな？ 折角だから一緒に登校しないか？」

「こづいうのは偶然とは言わん！」

さながら何事も無かったかの様に振る舞う瑠夏に、暁斗が思わずツッコミを入れる。

……が、当の本人は全く気にしてすらいない様子だ。

それどころか不満顔で暁斗を睨み付けている。

「暁斗はいつまで私の事を武蔵野と呼ぶんだ？ そんな他人行儀な呼び方では寂しいだろ！ 別に私は嫁とか家内とかカミさんとかハニーとか呼んでくれても全然構わないんだぞ？ というか、寧ろ望むところだ」

「ちょっと待て！ それ全部呼び方は違うが意味合いは一緒だろうっ！！……もういい。俺はもう行くからな」

付き合っていないと言わんばかりに背を向けて歩き出す暁斗。

「あつ、待てっ！ 分かった！ せめて名前！ 名前で呼んでくれ！ 今はまだそれで我慢するからっ！！」

手にしっかりと握り締めていたトランクスをカバンにしまうと、瑠夏は慌てて暁斗の後を追う。

毎朝無理矢理な設定の偶然を装い待ち伏せる瑠夏と一緒に登校するのは、暁斗にとってはもう当たり前になっていた。

暁斗は思い返す。

『暁斗！ お姉ちゃんは一人じゃ寂しいから引越してきなさいっ！
！ 断わるなら一生地味な嫌がらせを受ける覚悟をする事！ いいわね？』

元々決して都会とは言えないこの小さな田舎街で診療所を開業していた姉 由希奈は、遠く離れた都会に住む親許で、高校生生活を送っていた暁斗をその一言で転校させた。

由希奈はやると言ったら本当にやる女だという事を、暁斗も両親も嫌というくらい思い知らされていたのである。

そして転校してきた二日目から、三ヶ月に至る現在まで、瑠夏に付き纏われ続けている。

登校風景3

「なあ暁斗、一つ聞いてもいいか？」

暁斗の横まで追いついた瑠夏が、やや聞き辛そうに口を開く。

「何だ？」

「いや、以前から頻繁に暁斗の家に忍び込んでいたんだが、御両親の姿を御見かけた事がないものでな？ 少し気になっていたんだ」

問題発言をサラリと口にする瑠夏。

無論、暁斗にとっては聞き捨てならない事である。

「何をさも当然な事みたいに言ってるんだよ！ 犯罪だろそれ！？
いつだ？ いつ忍び込んでんだ！？」

猛烈な勢いで喰って掛かる暁斗だが、瑠夏は涼しい顔で人差し指をチツチツと横に振る。

「暁斗、今大事なのはそこじゃない。御両親の件だ。このままだと私を紹介する時に困るだろ？ 未来。そう、お互いの未来に関わる重要な事なんだぞ？」

「……………」

瑠夏といい、姉といい、どうして自分の周りには何を言っても無駄な人が多いのだろうか？

暁斗は全てを諦めて話を続ける事を選択した。

「俺の親は離れて暮らしてるよ。俺だけ姉貴に呼ばれて強引に転校させられたからな」

「……そうか」

事情を聞き、瑠夏は神妙に頷く。

「では、今は暁斗と御義姉様と嫁である私の三人暮らしという事になるな？ 手に手を取り合って頑張っていこうではないか」

極上の笑顔を咲かせる瑠夏。

「何でそうなるんだ！？ いつお前が嫁に来た！ それと御義姉様とか呼ぶなっ！！」

「……！ ちょっと待て暁斗！」

そんなやり取りを繰り返していた時、突然けたたましいクラクションの音が響き渡った。

二人は会話を止め、咄嗟にクラクションの音がした方へと目を向ける。

登校風景4

「危ないっ!!」

視線の先は車道。

そこに歩道を歩いていた一人の女性が、フラフラと吸い寄せられるように飛び出して行ってしまったのだ。

女性の目前には中型のトラックが迫っている。

突然の飛び出しに、トラックの運転手はクラクションを鳴らしながら急ブレーキを踏むが、元々スピードを出し過ぎていた為に止まりきれない事は誰が見ても明らかだった。

大惨事が起こる。

誰もがそう思った。

暁斗も思わず目を背ける。

この位置から現場までは100m近くある。どうあがいても女性を救出する事は不可能だ。

そして周囲にいた人間もまた、金縛りにあつたかの様に動く事が出来ないでいた。

その時である。

周囲のざわめきに、暁斗は横に居たはずの瑠夏の姿が見えない事に気が付いた。

「武蔵野!？」

ハッと車道へ視線を戻すと、すでに女性とトラックの間へと到着している瑠夏の姿がそこにあった。

しかし、女性を抱えて救助するには時間が無さ過ぎる。

このままでは瑠夏まで一緒にトラックに巻き込まれてしまうだろう。

「……………!!」

暁斗は思わず走り出した。

今更間に合わない事など分かっている。

しかし、考えるより先に体が動いてしまっていた。

その刹那、瑠夏の怒号が響き渡る。

「武蔵野流——」

言いながら左足を思い切り踏み込んだ瑠夏の足元のアスファルトが、その衝撃に耐え切れずドゴンツと音をたてて陥没した。

「鉄閃掌っ!!」

次の瞬間、腰、肩、腕と見事な捻りを加えて突き出した瑠夏の右掌底が、迫ってきたトラックの前面に触れる。

ドオンッ！！！

壮絶な衝突音が聞こえたかと思うと、トラックは縦に大きくバウンドしてその動きを止めた。

「スピードの出し過ぎは感心しないな」

ゆっくりと右手を下ろす瑠夏。

これが数々の格闘技大会で優勝を総ナメにし、いかなる試合でも不敗を誇る『鬼神』武蔵野瑠夏の姿である。

「む、武蔵野！」

目の前の信じられない出来事に啞然とする暁斗。

瑠夏は暁斗に振り向き、ニッコリと笑う。

「武蔵野ではなく『瑠夏』だろ？ 暁斗」

その表情は、すでに鬼神から暁斗命の瑠夏に戻っていた。

登校風景5

「よつこらしよつと！」

大騒ぎになっている車道を尻目に、瑠夏は放心状態の女性を抱えて颯爽と歩道で立ち尽くす暁斗の許へ戻ってきた。

「お、おい、大丈夫か？」

やや動転気味の暁斗の言葉に、瑠夏は微笑みを返すと静かに抱えていた女性を地面に降ろす。

瑠夏も女性も全く無傷な様だ。

「あれ……お前……」

暁斗は降ろされた女性の顔を確認すると、驚きの声を上げる。

「蕪木？ 蕪木じゃないか!？」

救出された女性は蕪木奈々。

暁斗や瑠夏と同じ学校の生徒である。

「ふおお?」

ブーツとしていた奈々は、暁斗の声にピクリと反応すると、大きな瞳を暁斗に向けた。

「おや、高中くんではないですか。おはようさんです」
のほほんとした声で挨拶をする奈々。

それは直前にトラックに撥ねられそうになっていた人間が出す声とは思えない程、呑気な挨拶だった。

「な、何だ暁斗？ し、知り合いなのか？」

言葉を交わす二人を見て、瑠夏は眉をひそめる。

恐らく、自分以外の女性と話しをしている事が引っかけているのだろう。

「ああ、同じクラスのやつなんだ」

「蕪木奈々です。よろしくです！」

にこやかにペコリとおじぎをする奈々。

それとは対照的に表情を強張らせる瑠夏。

「なななな何だと！？ お、お、お同じクラスだとおっ！？」

ワナワナと肩を震わせる瑠夏は2年B組。

暁斗と奈々は2年C組で、瑠夏とはクラスが違う。

「……そうか、ならば仕方ない。残念だ……非常に残念だ」

瑠夏はゆらりと奈々に近づくと、そのまま担ぎあげて車道へ向かい歩き出した。

「おいちょっと待ってって！ 何が仕方ないんだよっ！？ 非常に残念って何！？」

怪しい笑みを浮かべながら奈々を死地へと誘う瑠夏を、暁斗が必死になって止める。

「蕪木、大丈夫か？」

悪鬼と化した瑠夏から何とか奈々を奪還した暁斗が心配そうに尋ねると、奈々は特有のふんわりした笑顔で大きく頷いた。

「大丈夫ですよお。心配してくれてありがとうございます！」

そんなやり取りを膨れっ面で睨みつけている瑠夏は、フと思いついたように両手を胸の前でポンと合わせる。

「ああっ！ 痛あいつ！！」

いきなりオーバーアクションでその場に倒れ込む瑠夏。

そしてチラチラと暁斗を見ながら大袈裟に左足首を摩る。

「どうやらさっきので足首を捻ってしまったみたいだ！ これは惨事！ 乙女の大惨事だ！」

「蕪木、どこも怪我とかしてないのか？」

「うん。平気です！」

そんな瑠夏には一切目もくれず、二人のやり取りは続く。

「おい、暁斗？ ああーきいーとおー！ ここだぞー？ お前のマイスイートハニーがここで倒れてるぞー！ こっち向けー、ちよつとこっち向けー」

手招きと自分を指差す動作を繰り返す瑠夏だったが、それでも放置。

「立てるか？ 無理するなよ？ 一応病院行くか？」

「大丈夫、ありがとさんです！ 遅刻してしまうので行きましょう」

暁斗は奈々の手を取り立ち上がらせると、そのまま二人で歩き出した。

「ああーきいーとおおおー」

哀れ置き去りにされた瑠夏。

「……………クスン」

しょんぼりと立ち上がった瑠夏は、トボトボと学校へ向かう二人の
後を追い始めた。

登校風景 6

「ところで、どうして車道なんか飛び出したんだ？」

学校までの道すがら、暁斗は当然疑問に思ふ事を質問する。

「ん〜……そうですねえ」

奈々は人差し指を顎に当て、小首を傾げた。

やがてコクコクと細かく頷くと、思い出したかのように両手をパンツと鳴らす。

「そうですねえ！ アレですよアレ！ 車が走っていたからです！」

「……………はっ？」

この娘は何を言っているのだろうか？

暁斗は軽い目眩を覚えた。

そりゃ走るだろう。

車だもの。車道だもの。その為の物だもの。

「ふおっ？ 何か誤解されてる気が！？ 違ふんです！ アレです！ 今度新発売される、『冷凍 魁！漢炒飯』さんに乗せた車が走

つてたんです！ それはいつのまにか車道に飛び出してしまってもおかしくないと思います！」

絶句する暁斗に慌てて力説する奈々であったが、それでも充分過ぎるくらい意味が分からない。

「あー、まあ、その、なんだ。蕪木は炒飯が好きなんだな？」

「はい！ ちゃーはんさんヤツホウです！」

やや渴き気味に話を打ち切る暁斗に、奈々は両手で小さくガッツポーズをして応える。

その姿を見て暁斗は思う。

いつも教室の自分の席でポケーとしている蕪木とは、会話らしい会話を交わした事がなかった。

見た目可愛らしい蕪木は、男子間で意外に人気がある。

が、何故か蕪木をモノにしようとアプローチを掛けに行った連中は、揃いも揃って首を傾げながらスゴスゴと退散してくるのだ。

今回蕪木と絡んでみて、その理由が判明した。

(あまり関わらないようにしよう……)

そう心に決めた暁斗だった。

「高中くんは、ちゃーはんさん好きですか？」

そんな暁斗の気持ちとは裏腹に、奈々は食い入るような瞳で暁斗の顔を覗き込んでくる。

確かに可愛い。

「あ、ああ。好きだよ？」

内心ドキドキしながら頷く暁斗。

ベキリッ！

後方から街路樹をへし折るような音が聞こえる。

「ふおおお………そうですか！ ちゃーはんさん好きですかあ」

心底嬉しそうに微笑む奈々。

(………まっ、いいか)

その笑顔を見てすっかりと毒気を抜かれてしまった暁斗は、間近に見えてきた学校を眺めながら大きく伸びをした。

後方から聞こえる、電信柱をへし折るような音を聞きながら。

ブレイクタイム ヒロイン達の宴（前書き）

今回は少し本編を中止します。

2011年 10月29日現在。

総PV10000、総ユニーク2000突破という事で、急遽ヒロイン達に感謝をさせる企画を始めさせていただきます。

ブレイクタイム ヒロイン達の宴

瑠夏「何だこれは？ 突然何が始まったんだ？」

由希奈「ああコレね。何かこの作品の総PV数の10000達成と総ユニーク20000越えの感謝企画らしいわよ？」

瑠夏「あつ、御義姉様ではありませんかっ！ 暁斗を私に下さい！」

由希奈「いいわよお？ あいつ最近口応えばっかして生意気だから、好きにするといいわ。」

……それより、わざわざ本編止めてまでこんなもんを始めるなんて、作者も色々問題あるわね」

水月「そーですよね。あたしなんか、まだ本編で登場してないのに！ さつさと続き書けてんだいべらぼつめっ！」

奈々「まあまあ、ちゃーはんさんでも食べて落ち着いてください。余程嬉しかったんですよ」

瑠夏「むっ？ 出たな炒飯！ 暁斗をたぶらかす極悪人がっ！！」

奈々「ふおおおお！？ いつの間にか、炒飯と呼ばれています！？ ……それはそれで悪くないです」

由希奈「あつはっはっ！ 作者も意外だったんでしょ？ 10月13日に初投稿して暫くは、一日のユニーク数が2とか5だったし、0の日だってあったんだから」

水月「そりゃ意外だ。たった二週間ちよいでこんなになるとは夢にも思わないっしょ」

瑠夏「うん。今や一日のユニーク数が2000を越えて、PV数も1000越えてるからな……。何が起るか分からないものだな」

由希奈「上位作品の足元にも及ばないけど、マイナーはマイナーなりの成果に驚いてるって訳ね？」

水月「お気に入り登録数も28名様。感想や評価までしてもらったんだね？」

瑠夏「なにっ!? それは本当か！ 本当ならば、私は暁斗の嫁に成らざるを得ないではないかっ！」

水月「なんでだよっ!!」

奈々「感想を下さった『ふじのん様』『極神様』。まだ読んで下さっていますかあ〜？
ありがとうございます!!」

臯月（ううっ……緊張して話に入れない……）

瑠夏「それと、評価を下さった方。お気に入り登録をしてくれた方。作品を読んでくれる方々。心から感謝します」

臯月（ああっ！何かまとめに入ってる気がする!? ど、どうしよう）

由希奈「これからも『つよきやらっ!』は、細々続いていきますので、お付き合い下さると幸いです」

臯月（あうあうあうっ！完全にまとめに入ってるじゃないですかっ！）

水月「それじゃグダグダ続いたこの企画も、そろそろ終わりですか？ ……って、臯月ちゃん何してんの？」

臯月「ひゃうっ!?!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!

奈々「ふおおおっ!?!」

水月「うわわっ!?! 何? 何これっ!?!」

由希奈「だ、大災害っ!?!」

瑠夏「むっっ! この殺気……尋常じゃない!」

臯月「ら、ら、ららら、ラ、ランキング投票もあ、あ、有難うございます! 小説家になるう勝手にランキング、ジャンル別で3位になりましたっ!!!」

臯月の他全員「……怖いわ」

水月「そ、それより御感想も随時受け付けてるですよ!」

瑠夏「御感想を下さった方には、私達が感謝の返信をさせて頂きま

す

由希奈「まあ、御希望があったらだけどね？ 特に無ければ作者からの返信をお送りします」

奈々「待ってますよぉ〜！」

皐月「うう……ぜ、ぜぜ是非お願いしますっ！……！」

水月「それでは今回はここまでっ！……！」

全員「ありがとうございますっ！……！」

2年C組の人々

暁斗達が通う【静稜学園】

田舎という事こともあつてか、生徒数があまり多くはない。

校舎自体は三年前に改修工事が行われた事もあり綺麗だが、特に特筆する事もない、いわば普通の学校である。

「やれやれ、何とか遅刻せずにすんだな」

「はい、良かったです」

教室に入った暁斗と奈々は、クラスメイト達に挨拶を交わしながらそれぞれの席へと移動する。

鞆を机の横に設置されたフックに掛けて着席した暁斗は、頬杖を付きながら少し離れた席に座る奈々をぼんやりと眺めた。

（やれやれ、大変だったな）

何故か幸せそうにニコニコ笑顔の奈々は、暁斗の視線に気が付くとこちらに向かって小さく手を振ってきた。

「うっ……」

思わず赤面しながら目を逸らす暁斗。

『武蔵野やめろっ！ 何するつもりなんだ！』

『止めるなっ！ 暁斗が！ 暁斗が炒飯の毒牙に掛かろうとしているんだっ！ こんな壁、ぶち抜いてくれるっ！！』

『瑠夏ちゃんっ！ 何？ 炒飯って何っ！？』

隣の教室はちよっとした騒ぎになっているようだが、今の暁斗の耳には届いていない。

「おい、何赤い顔してんだよ？」

俯いていた暁斗は、掛けられた声に反応して顔を上げると、そこに一人の男子生徒が立っていた。

「ああ、何だ。ミゾか」

声の主を確認した暁斗は、あからさまにやる気がない態度で応える。

『ミゾ』こと溝口 慎一（みぞぐち しんいち）。

暁斗が転校してきた時からの、自称暁斗の親友である。

「お前、さっき奈々ちゃんと一緒に教室入って来ただろ？ まさか一緒に登校してきたんじゃないだろうな？」

いきなり詰め寄ってくる慎一。

「ああ、色々あってな」

正直朝っぱらから鬱陶しいなと思いつつながら返事をする暁斗に、慎一は頭を抱えて絶叫し始めた。

「マジかよチクショウ！！ 俺なんかなあ！ 朝のニュース観てて、画面の向こうの女子アナウンサーと目が合っただけでドキドキしてんのお前って奴はっ！！」

……真性のダメ人間だ。

身悶える慎一を自分の前から突き放すと、暁斗は無言で授業の準備をし始めた。

2年C組の人々2

コツコツと靴音が聞こえ、窓に教室へ向かって廊下を歩いてくる人物のシルエットが見えると、生徒達は談笑を止めて各々の席に着き始めた。

カラカラカラ。

教室のドアが遠慮がちに開き、おずおずと顔を出す人物。

2年C組担任教師、国籐 嘉苗（こくとう かなえ）である。

重たい足を引きずる様にし、たつぷりと時間を掛けて教壇へ上がった嘉苗は、生徒達を見渡すと静かに口を開いた。

「先生、とっても不幸です」

朝の挨拶のセオリーを無視し、開口一番の言葉がこれである。

常にどんよりとしたオーラを身に纏い、発する言葉がネガティブまつしぐらの彼女は、生徒達から『ミス マイナス思考』と呼ばれている。

セミロングの黒髪が良く似合う、とても可愛らしい外見の持ち主なだけに、非常に残念な女性だと周りから思われていた。

「今朝、黒猫が先生の前を横切りました」

言いながら嘉苗はチョークを手に持つと、黒板に向かい何か書き始めた。

【自習】

「……なので、先生はお祓いに行かねばなりません。後は宜しくお願ひします」

言うが早い嘉苗はさっさと教室を出て行ってしまった。

教室内に暫しの静寂が訪れる。

呆気にとられた生徒達は、ある事を思い出していた。

国藤嘉苗は、お祓いに給料の七割を掛けている……という噂である。

この様子ではその噂は事実なんだろうなどと、その場にいる全員が感じていた。

「てりやてりやてりやてりやてりやあっ!?!」

その時、教室を支配していた静寂を打ち破る賑やかな声と、教室に向かい爆走してくる足音に、生徒達は驚いて廊下に目を向ける。

ガララッ!!

先程の嘉苗とは打って変わり、勢い良く教室のドアが開かれた。

「羽田水月、ただいま見じゃわっ!?!」

ドアを支えにブレーキを掛けようとした羽田水月だったが、自身の勢いが強過ぎて止まりきれず、そのまま壮絶な音と共に廊下を転げながら通り過ぎていった。

教室のドア付近には、持ち主を失った器とコーンフレークが散乱してるだけだった。

2年C組の人々3

「うっう……羽田水月見参」

ややあって、ボロボロになりながら這いずる様にして教室へ再登場した水月だったが、一人大騒ぎを演じた水月に対して、どうリアクションを取って良いのか分からないクラスメイト達の反応は極めて薄い。

「あのー、出オチに失敗した上に嘔んだ拳句、盛大にすっ転んだ年頃の乙女なあたしは一体どうしたら良いのでしょうか？」

むっくりと起き上がった水月は、半べそをかきながらヨタヨタと自分の席に着く。

やかましい奴が来た。

暁斗は隣に着席した水月を一瞥する。

「やあやあ暁斗君ではないですか。ごきげんうるわしゅー」

水月は満面の笑みで暁斗に絡んできた。

……しまった。

暁斗はチラッと見た瞬間に目が合ってしまった事を後悔する。

「今日はアレですか？ 先生が来る前に到着出来て良かったですよ」

そんな暁斗の心情とは裏腹に、ケタケタと笑いながら話を続ける水月。

「いや、先生はもう来たよ」

黒板に書かれた文字に全く気が付いていない様子の水月に、暁斗は黒板を差して教える。

「うおっ！？マジですか？ マジですかこれっ！？ あっちゃー全力で走ってくるんじゃないかったあ」

黒板に書かれた自習の文字を確認すると、水月は失意に支配された様到大袈裟に天を仰ぐ。

「まあいいや！ ところで暁斗君」

が、次の瞬間にはもう立ち直り笑顔を咲かせている。

「なんだよ？」

忙しい奴だ。

良く言えば気持ちの切り替えが早く、表情が豊か。

悪く言えば、バカなんだろう。

暁斗は水月の顔を眺めながら苦笑いする。

「一緒に片付けてくれないかな？ 隣の席のよしみで」

水月はニンマリとしながら教室の出入り口付近に散らばったコーンフレークを指差す。

「何で俺が……」

言いかけた暁斗だったが、屈託のない子供の様な水月の笑顔を見ている内、どうしても良くなってきた。

「まったく、仕様がないな。ほら、ちゃっちやと片付けるぞ！」

「ガッテン承知っ！！」

席を立ち、掃除用具が置かれているロッカーへと向かう暁斗に、水月は敬礼のポーズを決めると、嬉しそうにその後を追った。

お昼休みはみんなと

昼休み。

午前の授業を終えた生徒達が一斉に動き出す。

「高中、学食が購買行こう……ぶわふっ！」

暁斗の許へとやって来た慎一は、横から突進して来た瑠夏により教室の端まで突き飛ばされた。

「暁斗！ お昼を一緒しようじゃないか！」

「あ、ああ……」

壁にへばり付いたままピクリとも動かない慎一を気にしながら、暁斗はコクリと頷く。

「昼飯はどうするんだ？ パンでも買いに行くか？」

暁斗の問いに、瑠夏は少し考える素振りを見せると、親指を自分の身体に向けてビシッと指差した。

「さあ、遠慮なく召し上がれ」

「いや、召し上がれって言われてもな……とりあえず購買行って何か買って来よう」

また暴走し始めている瑠夏を制し、席を立とうとした暁斗はクイクイと制服の袖を引っ張られた事に気が付く。

「どうした羽田？」

袖を引っ張っていたのは水月だった。

水月は暁斗の袖を持つたまま俯いている。

「あのね？ あたしね？ お腹すいてるの？」

ポツリと呟く水月。

「そうか、じゃあ一緒に行くか？」

暁斗の言葉に水月は首を横にブンブンと振る。

「あたしの親が旅行行っちゃてね？ お弁当がない訳ですよ。そして、お財布も忘れちゃってお金もない訳ですよ。」

そこでバツと顔を上げると、水月は瞳をウルウルさせながら暁斗に飛び付いた。

「オゴって暁斗君っ！ 朝ご飯のコーンフレークもばら撒いちゃったし、このままじゃ飢え死にしちゃうっ！..！」

「お、おい... ..」

抱き付いて必死に訴える水月と、戸惑う暁斗。

そして……

「羽田……私の前でそんな暴挙に出るとは良い度胸だ。飢え死にするより先の死を選ぶ訳だな？ 良かろう、せめて奥義で葬ってやるうではないか！」

怒り心頭の瑠夏。

「あわわっ！」

瑠夏の半端ではない圧力に、水月は慌てて離れる。

「うえ〜ん！ お腹すいたよお！ ひもじいよお！」

「分かった分かった！ パンくらいなら奢ってやるから騒ぐな」

手足をバタつかせて泣く水月を見兼ねた暁斗が口にした言葉を聞いて、水月はパアツと明るい表情に変化した。

「本当？ ホントに本当？」

「ああ、だから早く行こうぜ」

暁斗は膨れっ面で腕に絡み付いている瑠夏を少し気にしながら、水月に向かって微笑む。

「うんっ！ー！」

三人は購買に向かうべく教室のドアを開けた。

「ちゃーはんさんタイムです！」

そこには炒飯が山盛りになった鉄鍋を持った奈々がニコニコしながら立っていた。

お昼休みはみんなと2

昼休みの教室の片隅で、山盛り炒飯入り鉄鍋を囲む四人。

とつてもシユールな光景である。

「しかし、何だつて炒飯なんだ？ 昼飯ならパンや普通の弁当でいいだろうに」

自習の時間を利用して、家庭科室でわざわざ作ってきたという出来たて炒飯を眺めながら暁斗が言つと、途端に奈々の顔から笑みが消えた。

「高中くん……好きって言いました。ちゃーはんさん好きって言いましたっ！..!」

「うおっ……!？」

普段おっとりしている奈々とは思えない迫力に、一同驚きを隠せない。

「ま、まあ、その、何だ。折角だから冷めない内に頂こう！ な？」

焦った暁斗の提案に全員コクコク頷くと、一斉に支給された蓮華を炒飯に伸ばした。

「さあ、召し上がれ」

先程とは打って変わり、いつものほんわかスマイルに戻った奈々。

「美味いつ!!」

炒飯を一口食べた瞬間、満場一致で賛美の声が上がった。

「ふう……」

仲川皐月は軽く溜息を吐くと弁当の蓋を閉じる。

昼休みになると、生徒達の多数は中庭に移動して、友達と談笑しながら各自思い思いのランチタイムを満喫している。

皐月は中庭の目立たない場所に設置されたベンチに座り、その楽しそうな光景を一人羨ましそうに眺めていた。

そんな中、校舎の二階の教室から歓声が聞こえてきた。

あれはC組？

皐月は何事かと目を向ける。

「楽しそうだな……」

皐月は淋しげに呟いた。

自分もあの輪の中に加わって、一緒に笑えたならどんなに楽しいだ

ろう。

しかし、皐月にはそんな楽しい学生生活の思い出など皆無だった。
常に一人。

それが皐月が歩んできた道。

皐月は目を伏せると、下唇を軽く噛んで立ち上がる。

もう一度だけ笑い声で溢れるC組の教室に目を向けると、しょんぼりとその場を立ち去って行った。

「どうした暁斗？」

2・Cの教室では、すっかり奈々の炒飯を平らげた暁斗がぼんやりと窓の外を見ていた。

そんな暁斗の様子を気にした瑠夏が声を掛ける。

「いや、前から気になってたんだけど、いつも昼になると一人で弁当食べてる娘がいるなと思って」

「ん〜どねどね？」

暁斗の言葉を聞いた水月が窓の外を覗き込むと、奈々と瑠夏もそれに続く。

しかし、すでにその娘……皇月の姿はそこには無かった。

お昼休みはみんなと3

「何だ瑠夏ちゃん、あの娘知らないの？ 同じクラスだろ？」

突然の声に窓の外を覗いていた全員が振り返る。

声の主は慎一だった。

瑠夏は慎一の姿を確認すると、やや怪訝そうに口を開く。

「誰だお前？」

「昼休み開始そうそう壁にめり込む勢いで突き飛ばした相手に向かって、誰だ扱いはないんじゃないかな！？ 俺ですよ！ 溝口慎一ですよ！ 思い出してくれましたか？」

予想外の瑠夏の反応に噛み付く慎一。

若干涙目である。

瑠夏は腕組みをして眉間にシワを寄せながら首を傾げていたが、やがて納得したように慎一を指差した。

「ああ思い出した！ パナ男！ パナ男じゃないか！」

パナ男とは瑠夏が使う、慎一に対する呼び名である。

瑠夏曰く『まるで酢豚に混入しているパイナップルの様な存在の男』という意味を込めた略語らしい。

ちなみに瑠夏は酢豚に入っているパイナップルが大嫌いだ。

「あの……パナ男って呼び方、そろそろ止めてもらえませんか？」
ゲンナリした様子で懇願する慎一だが、瑠夏は全く気にする気配はない。

「ところでパナ君、さっき居たって人知ってるの？」

と、水月。

「とてもとても気になりますので、教えて下さい。お願いしますですパナさん」

と、奈々。

「いいからさっさと見えよパナ」

と、暁斗。

「ちよつと待てっ！ 寄って集ってパナパナ言うな！！ 特に高中！ お前普段と呼び方変わってるじゃないか!？」

涙目どころか、すでに泣いている慎一が各人指差して猛抗議をする。

「五月蠅いパナ男。これ以上騒ぐならば、今すぐ息の根を止められるか、息の根を止められるかの何方かを選ぶがいい」

「選択の余地ないじゃんっ!？」

苛つき気味な瑠夏の鬼選択に、慎一は声のトーンを落とす。

「まあまあ、それよりも早いとこ話せよパナ！昼休み終わっちまうぞ？」

慎一の肩をポンポンと叩きながら笑う暁斗。

「うう……遂に瑠夏ちゃん以外の人達にまでパナとか呼ばれるようになったしまった」

ガツクリと肩を落とした慎一だったが、その場にいる全員が自分の話を待っている状態に気が付き、慌てて話を始めた。

一人ぼっちの少女

「あの娘はB組の仲川臯月だよ。瑠夏ちゃんと同じクラスだろ？」

慎一が言つと、瑠夏は小首を傾げる。

「うーん、聞いた事あるような無いような」

「B組の仲川臯月って言つたら、結構有名なんだけどなあ……聞いた事ない？」

慎一は首を傾げたままの瑠夏から視線を他の三人に移すが、一同揃つて首を傾げる。

「はいはいはいはいー！ 一つ質問です！ 有名って、どんな風に有名なんですか？」

水月が拳手をしながら発言すると、慎一は少しだけ声のトーンを落とした。

「高中が目撃したように、彼女はいつも一人で行動してる。それは何故だと思つ？」

フルフルと首を横に振り、分からない事をアピールする水月。

他の皆も同様である。

慎一は各人の顔を見回すと、ゆっくりと溜めながら口を開く。

「……死神。それが彼女のあだ名さ。実際、彼女にコンタクトを試みた連中は、その後絶対に近寄ろうとしない。それどころか、何かしらのトラウマを植え付けられて暫く夜も眠れなくなる程らしい」
静まり返る教室。

誰もがやや表情を強張らせたまま、黙りこくっていた。

「しかし……」

その沈黙を破ったのは瑠夏だった。

「私が居る教室でそんな物騒な輩が居るとすれば、流石に気が付くはずだぞ？　いくら私が授業中、常に暁斗の気を探る事に全神経を集中しているとしてもな」

「お前そんな事やってんのかよ……」

「勿論だ。たまに我慢出来ずニヤけてしまう程だぞ？」

半ば呆れ顔の暁斗に力強く親指を起てる瑠夏。

「でも、俺が見る限り凄く寂しそうだったぜ？　弁当食ってる間、周りをチラチラ見てるみたいだったし」

何よりも、中庭から去る時の姿。

あれは孤独を好む者の姿では決してないと思えた。

「それでは仲川さんは、本当は寂しい思いをしていると？　一緒に
ちゃーはんさんを食べたいと思っっているわけですか？」

奈々が身を乗り出す。

「ちゃーはんさん信者獲得のチャンスとでも思っているのだろう。」

「いや、炒飯はどうかは分からないけど、俺にはそう見えただ」

奈々を一旦押さえた暁斗が、黒板の向こうにあるB組の方に目を向ける。

「そうか。なら、私が声を掛けてみるとしよう。クラスメイトとして」

瑠夏が椅子から立ち上がるうとした時、水月が両手をブンブン振ってそれを制した。

「ちつと待ったあつ！　そこはあたし！　あたしの出番でしょー！
誰とでも友達になれる愉快な水月ちゃんにチャレンジさせないで、
一体誰がチャレンジするというのか！」

必要以上に自己アピールを繰り返す水月。

「わかったわかった！　じゃあとりあえず頼んだ。頑張ってこいよ」

「あいよっ！　任せときつ！　グッバイさよなら再来アディオス！」

跳ねる様に、いや、実際跳ねながら教室を出ていく水月に、若干不安な眼差しで見送る一同。

「あわっ、あわっ、あわわわわわっ!？」

B組の教室から机や椅子が倒れる音と、水月の悲鳴が聞こえてきたのは、それから暫くしての事だった。

一人ぼっちの少女2

ああ、何という事だろう。

次第に緊張が溶け、我に返った皐月は目の前に広がる惨状を見て絶句していた。

散乱する机や椅子。

怯えた顔をしながら教室の隅でガタガタ震えているクラスメイト達。

そして……

「あ、あ、あ、あわわわわ！」

ポニーテールを小刻みに振動させて腰を抜かしている、笑顔で話し掛けてきてくれた女生徒。

また……やってしまった。

「ううっ！」

いたたまれなくなった皐月は、両手で口を押さえながら教室を飛び出して行った。

ともすれば嗚咽が漏れてしまいそうになる。

教室を出る時、誰かにぶつかってしまったが、今の皐月にはそれを

謝る事さえ出来なかった。

「……………」

物音と悲鳴を聞いてB組へとやって来た暁斗は、入り口でぶつかって行った女生徒の後ろ姿を見送っていた。

ぶつかった瞬間に見えた頬に光るもの。

あれは……涙？

「…………泣いていたのか？」

思わず呟く暁斗。

「びええええんっ！！ 怖かったよう！ 殺されるかと思ったんだようっ！！」

B組の教室からは、水月の盛大な泣き声が響き渡っている。

「おおよしよし！ 大丈夫ですか？ そんな時にはちゃーはんです」

「おい炒飯。意味が分からんぞ」

暁斗がB組の教室に目を向けると、泣きじゃくる水月を奈々と瑠夏が一生懸命なだめていた。

「ほら言わんこつちやない。死神のあだ名は伊達じゃないって事さ」
暁斗の隣でやれやれと首を振る慎一。

「おいパナ。あれが仲川臯月か？」

「ああ、間違いないよ」

暁斗は慎一に確認をすると、思考を巡らせる。

本当に怖い人物なのだろうか？

毎日昼休みに中庭で見る臯月の姿は、とてもそんな風には思えない。

そして、さっきの涙……。

「……よっっ」

暁斗は決心した表情で頷く。

「ちょっと行ってくる。羽田の事は頼んだ」

「えっ？ ちょっと、どこ行くんだよ!？」

暁斗は慎一の肩を叩くと、廊下を走り出した。

臯月が走り去っていった後を追う様に……。

一人ぼっちの少女3

「んっ？ 暁斗は何処に行っただ？」

暁斗の姿が見えなくなった事を敏感に察知した瑠夏がキョロキョロと周りを見る。

「高中なら突然廊下を走って行っちゃったよ」

「廊下を？ 一体何処へ……」

慎一が廊下を指すと、瑠夏は一瞬訝し気に眉をひそめたが、すぐにハツとして口許を緩め始めた。

「フツ……そうか暁斗め。私が暁斗の部屋に忍び込んだ時、机の上にさりげなく置いておいた婚姻届を提出しに行っただな？ よしこれで私は晴れて人妻だ！ 祝い！ 全員祝福しろっ！ 遠慮なく高中夫人とか呼ぶが良いっ！！」

「……その発想にたどり着く武蔵野さんて、ある意味すごいと思うんだ」

恍惚の表情を浮かべ、両手を広げながらクルクルとターンしている瑠夏に、困惑と呆れが入り混じった顔で呟く奈々。

その頃暁斗は皐月の後を追ひ、校庭の方までやって来ていた。

「どこに行っただ？」

ザツと校庭を見渡すが、皐月の姿は見えない。

「まさか学校の外まで出ちゃってんじゃないだろうな……」

苦い顔付きで独り言ちながら、暁斗は体育館の方へと足を向ける。

通りすがりの生徒に聞き回った処、皐月が校庭の方へ向かったのは間違いない。

とすると、皐月が校外に出ていなければ残された場所は体育館のみ。

「何で俺はこんなに必死になってんだろ……」

自分でも不思議な事だが、中庭で見た寂しそうな姿と、何よりもぶつかった時に見た涙が暁斗を突き動かす。

本当に皆が言うように死神なのか？

その真相を確かめたい。

そんな思いで頭が一杯になっていた。

「やれやれ……難儀な性格だな」

暁斗は苦笑いしながら体育館へ向けて走り出した。

一人ぼっちな少女4

体育館まで来た暁斗だったが、昼休みという事もあり人影は見えない。

「いない……か」

ここにも居ないとすれば、他に探す場所は考えつかない。

そろそろ昼休みも終わる時間だ。

暁斗は諦めて教室に戻ろうと、来た道を引き返そうとした。

その時である。

体育館裏から、風に乗って微かに声が聞こえてきた。

体育館裏には小さなうさぎ小屋がある。

あまり生徒達の関心がないその小屋は、用務員が世話をする時からいしか人が近づく事がないと思っていた。

事実、暁斗もその存在を忘れていたくらいである。

暁斗は転校初日に校内を案内された時以来初めてうさぎ小屋の方を覗いてみる。

そこには木材とトタン板で作られたオンボロのお粗末なうさぎ小屋

がひっそりと建てられており、その前に膝を抱えうずくまる様に座る人物がいた。

皐月である。

どうやら暁斗に気が付いていない様子の皐月は、小屋の中のうさぎ達に向かって何やら話掛けていた。

「……やっぱりダメだね私。折角お友達が出来るチャンスだったのにね」

言いながら自嘲気味に笑う皐月。

「いつもそうなんだ。いざって時に緊張しちゃって相手を怖がらせちゃう。それじゃダメだって事くらい分かってるんだけどね？ 気が付いたら一人になっちゃってる」

声が震え、時折鼻をすする音が聞こえる。

「……どうしてかなあ？ どうして私はこうなのかなあ？ 私はこのまま一生一人ぼっちなのかなあ？ うっ、うっうっ……!!」

言っている内に耐え切れなくなったのだろう。小刻みに身体を震わせながら、ポロポロと大粒の涙がその瞳から溢れ始めた。

その姿を黙って眺めていた暁斗は確信した。

やはりこの娘は死神なんかじゃない。

皆が言うように多少の問題はあるかもしれない。しかし、今日の前

その笑顔を受け、緊張のリミットが臨界点に達した皐月から、大気を揺るがすドス黒い殺気のオーラが噴出し始めた。

一人ぼっちの少女5

「うおっ!？」

尋常ではないオーラに暁斗は思わず後退る。

先程まで涙しながらうさぎに話し掛けていた可愛らしい少女が、いまや阿修羅か不動明王のような圧力をぶつけて来ているのだから無理もない。

染めてはいない天然の茶髪が逆立ち、大きく見開いた瞳の黒眼は極端に収縮。

更に強く嚙んだ下唇からは一筋の血が流れている。

「う、う、ひ、ひっうう……」

終いには喉がカラカラになっているのか、かすれ声で変な呻きを発する始末。

どれを取っても通常の人間に耐えられる許容範囲を大幅に超してしまっている。

他の生徒達もしかり、水月が腰を抜かしてしまったのも頷ける絶対的な恐怖がそこにあった。

「ひぐっ! ひぐっ! ひぐっうっ!」

皐月から巻き上がる殺気オーラが一段と勢いを増す。

うさぎ小屋のトタン屋根が音を立てて振動し出し、中にいるうさぎ達は死を覚悟したのか、小屋の隅で丸まったまま動かなくなっていた。

そんな絶大な殺気オーラを真つ正面から受けている暁斗もまた例外ではない。

膝は震え、全身の毛穴という毛穴は開き、生物としての生存本能が『逃げろ!』と激しく警報を鳴らし続けている。

「ぐ、ぐぐっ! これは、す、凄いな……!」

何故皐月が死神と呼ばれ、何故常に一人ぼっちだったのか、暁斗は身をもって理解した。

しかし暁斗は踏み止まる。

震える膝を両手で抑え込み、真つ直ぐ皐月を見据えて一步前へと踏み込んだ。

「……えっ?」

そんな暁斗に小さく驚きの声を漏らす皐月。

経験上、この段階でこんな行動を示した人は一人もいない。

腰を抜かしながら這いずる様に逃げ出すか、脱兎の如く全速力で逃げ出すかの二択だった。

しかし今目の前にいる人は違う。

全身を震えさせながらも、腰を抜かす事もなく、それどころか徐々に自分に向かって歩み寄って来てくれている。

「ど、どうして……?」

初めての経験から戸惑いを強める皐月。

「ど、どうしてもへったくれもねえよ……」

暁斗は強張ってしまったている頬の筋肉を無理矢理釣り上がらせて笑顔を作ってみせる。

「このくらい、俺が経験してきた恐怖に比べたらどうって事ねえんだよっ!」

そう叫ぶ暁斗の脳裏には、姉 由希奈の顔が浮かんでいた。

くその頃の由希奈く

「クシユンツ! ああごめんなさいね? どっかのジエントルメンが私の噂をしてるみたいで。えっ? あー、診察ね? はいはい。えーと、咳、発熱、関節痛、喉の痛みだったわね? それは恋の病です。お大事に」

暁斗は幼い頃からやりたい放題だった由希奈に逆らった時に見せられた地獄を思い出し、ブルリと身震いをする。

瑠夏にしてもそうだ。

グリズリーを一撃で葬り去る攻撃力を持った人間に日々付き纏われている暁斗にとって、殺気だけの皐月は真の恐怖ではないのだ。

一人ぼっちの少女了

「だから……俺は逃げたりはしない」

言いながら暁斗は皐月に手を差し伸べる。

「来いよ」

「えっ………?」

予想外の展開に困惑の色を隠せない皐月は、少々間の抜けた声を上げた。

「何間抜けた声出してんだよ。寂しかったんだろ? 一人じゃ辛かったんだろ? だから昼休みに楽しそうに飯食ってる奴らを羨ましそうに見てたんだろ?」

暁斗は更に手を伸ばす。

「だったら来いよっ! 俺が友達になってやる! それにもっと友達を増やしてやる! だから来いっ! 一人で泣いてんじゃねえっ!」

「……!」

暁斗の言葉に、皐月の瞳から涙が溢れ出る。

それは先程までの悲しみの涙とは違う、感極まった嬉しさのあまり

に溢れた涙だった。

「あ、あ、ありがとうございます……高中さん」

今やすっかりと殺気のオーラが消え、普通の少女に戻っていた皐月が、差し伸べられた手に恐る恐る触れようとする。

しかし、手が触れようとした瞬間、暁斗はすっと伸ばした手を引く。

「えっ!?!」

驚いた顔で暁斗の顔を見る皐月。

すると暁斗はニツコリと笑いながら、人差し指をチツチツと横に振った。

「高中さんじゃなくて『暁斗』だろ？ 呼びにくけりゃ『暁斗君』でも可。友達なんだから、もっとフランクに行こうぜ！ な？ 皐月！」

そう言って再び手を伸ばす暁斗。

「はっ、はっ、はいっ！宜しくお願ひします暁斗君っ!！」

満面の笑みを浮かべた皐月は、今度こそ差し出された手を握り返した。

「じゃあ行くこうぜ！ 昼休みも終わっちゃまっし」

暁斗は掴んだ手をグイッと引っ張る。

「はいっ！」

皐月は嬉しそうに大きく頷くと、暁斗と共に走り出した。

こうして孤独だった少女は念願の友達を手に入れ、一人ぼっちで過ごしていた寂しい日々を終止符を打ったのだった。

友達をつくるうっ！

「……なるほどねえ。お昼休みに突然いなくなったと思ったら、そんな事してたんだ」

放課後、暁斗から事の成り行きを聞いた水月は、椅子の背もたれに寄り掛かりながら周りの反応を伺う。

生徒達が帰宅したC組の教室には、暁斗に集められた瑠夏、奈々、水月、慎一が暁斗の話に耳を傾けていた。

「うむ」

腕組みをして話を聞いていた瑠夏が、何かに納得した様子で頷くと、カッと瞳を見開いた。

「ギャップ萌えだな？」

「……はっ？」

突拍子もない瑠夏の発言に、暁斗を始め全然が頭の上にクエスチヨンマークを出現させながら瑠夏を見る。

「アレだ。普段は恐ろしい感じの娘が、実は可愛らしかったとかいって、そのギャップに世の男性からやたら支持を受けたりするヤツだろ？」

言いながら瑠夏は傍らに置いてあった自分の鞆をゴソゴソと漁る。

そして、中から猫の耳がついたカチューシャを取り出すと、そのまま自分の頭に装着した。

「えっと、瑠夏さん？ 何をしてるのかな？」

意味不明な瑠夏の行動、そして言動に、どう対処して良いのかわからない暁斗。

「ちょっとした対抗心だ。気にするな……にゃん」

「いや、無理に『にゃん』とか付け足さなくていいから。そもそも色々間違ってるし」

斜め上の思考で突っ走る瑠夏に困り果てた暁斗は、助けを求める様に周囲の人間を見ると、それに感付いた奈々が直ぐ様発言をした。

「でも襖を閉める猫って、化け猫らしいですよ？」

「全然助け舟になってねえじゃねーかつ！ これ以上話を脱線させるんじゃないっ！！」

ただ話を拡大させただけの奈々に、暁斗が盛大にツツコミを入れる。

「ままま、落ち着いて。要するに、あたし達が仲川さんの友達になればいいんでしょ？」

場の雰囲気を読んだ水月が話を元に戻す。

「でもさ、羽田ちゃん大丈夫なの？ 腰抜かす程怖がってたじゃん」

昼休みの出来事を回想しながら慎一が問うと、水月はニカツと笑って親指を起ててみせた。

「大丈夫！ あの時は正直怖かったけど、ちゃんと事情を聞いた今となつては全然平気ですとも！」

と、戯ける水月。

「ところで高中くん。何で私達にこの話を持ってきたんですか？ 武蔵野さんとはかく、お友達を作るといふなら、最初は同じクラスの方の方が良いと思うんですよ」

奈々が疑問を投げ掛けると、暁斗の表情が僅かに強張る。

「えっ？ あ、いや、ここに集まってもらったメンバーだったら、臯月を色眼鏡無しで快く受け入れてくれると思ったんだ！ ほら、皆優しいしな！」

臯月があんなだから、まずはおかしな集団であるこのメンバーから友達にしてしまおうという目論見があつた事は、口が裂けても言えなかつた。

友達をつくらう！ 2

「ま、まあ、とにかくだ。話は理解してくれたと思う。どうだ？
皆、皐月の友達になってやってくれないか？」

作り笑いを浮かべながら、暁斗は皆の顔色を伺う。

そんな中、瑠夏が無然とした表情で口を開いた。

「先程から気になっていたんだが……。何故、仲川の事を皐月と
名前で呼んでいるんだ？ 妻であり、嫁であり、家内であり、スイ
ートハニーであるこの私にすらも、今朝まで苗字で呼んでいたじゃ
ないか？ どういう事なのか説明してもらおうか……。にゃん」

「いや、にゃんの無理矢理付け足しはもういいから……。ってうか、
まだやってたのかそれ」

暁斗は絶賛猫耳装備中の瑠夏を呆れ顔で見る。

「俺も最初は仲川と呼んでただけど、あいつと友達になると決め
た時から名前で呼ぶようにしたんだ。その方が親しみやすいだろ？

勿論、皐月も俺の事を名前で呼んでるよ」

ほお〜っと、皆から納得の声上がる。

「じゃさじゃさ！ あたし達も名前で呼び合おうよ！ 友達じゃん
？ あたし達も、もう友達でしょ？」

水月が瞳を輝かせながら提案すると、その場にいる全員がその意見に賛同の意を示した。

「よし！ これから名前で呼び合おう！ 宜しくな？ 瑠夏、奈々、水月、それにパナ」

「ちょっと待て！ 何か俺だけ名前で呼ばれてないんだけどっ!？」

一人だけ除外された慎一が、猛然と抗議をする。

「それでは……コホン。暁斗くん、肝心の臯月ちゃんは今どこにいるんですか？」

名前で呼ぶのが少し照れ臭いのか、奈々はやや頬を染めてはにかんでいた。

なお、慎一の抗議の件については全く触れる気配は無く、見事にスルーされた慎一は静かに着席をするしかなくなっていた。

「臯月は教室の外にいるよ。皆が自分を受け入れてくれるかどうかを心配し過ぎて、倒れそうになっちまってな？ だから最初に俺が話を通すまで、廊下で待たせてあるんだよ」

「ひゃっ……」

その頃C組の外の廊下では、何故か正座をした臯月が高速で掌に人
という字を書き、飲み込むという作業を一心不乱に繰り返していた。

友達をつくらう！ 3

もうそろそろ落ち着いた頃だろう。

暁斗は皐月が待つ廊下に目をやると、皆に皐月を呼ぶ事を告げる。

「OK！ ドンときやがれですよ！」

水月が胸を叩くのを皮切りに、満場一致で了解の意思を表す。

それを受けて頷いた暁斗は、廊下の方へと向き直ると、皐月に向かって声を掛けた。

「よしっ！ 皐月カモンッ！！」

ガンッ！！

暁斗が呼んだ瞬間、教室のドアから衝突音が聞こえてきた。

どうやらドアを開く事すら忘れてしまった皐月が頭をぶつけた様だ。

初っ端からの不安要素で、笑顔が固まる暁斗陣営。

やがてカラカラと遠慮がちにドアが開くと、見事なまでに朱に染まった、湯でタコ状態の皐月が顔を覗かせる。

ガシャコン！ ガシャコンッ！！

そんな音がリアルに聞こえて来そうな歩き方で、不器用に教室に入ってくる皐月。

腕と足の動きが連動してしまっている。

まるで昭和の時代に連想されていたロボットの様だと、その場にいる全員が思っていたに違いない。

たつぷりと時間を掛けて皆の所へと辿りついた皐月は、完全に眼を泳がせながら直立不動の体制に入る。

「こ、ここ、こにゃにゃち……こんにちはっ！ さ、先程御紹介に預けました仲川皐月でふ……ですっ！ こ、こ、この度は私のお友達に、なっ、ななっ頂けるとの事で、とても光栄至極に存じておりますですすっ！ こうなったら世界を狙えるお友達になれる様精一杯胸一杯頑張らさせて頂く所存ですっ！！ ど、ど、どどどどど、どうか宜しくお願いしにゃ………しますですハイッ！！」

支離滅裂な挨拶を済ました皐月が、勢い良く直角にお辞儀をする。

「ぶぶっ！？」

そして前にあつた机に顔面をぶつけ、そのままひっくり返ってしまった。

「……え〜と、どうしようかコレ？」

強打した鼻を抑えて転げ回る皐月を眺めながら、苦笑いを浮かべる
暁斗。

「とりあえず、復活するまで待った方が良いんじゃないかな……」

奈々も曖昧な微笑みで頬を掻く。

皐月が痛みから解放され、再び皆と向き合ったのは、それから十分後の事である。

友達をつくろう！ 4

「……色々とお見苦しい処をお見せして申し訳ありませんでした。改めまして、仲川臯月です。どうか宜しくお願いします」

ぶつけた鼻を真っ赤にしながら、臯月は再度頭を深々と下げる。

勿論、机の位置に十分注意を払いながらの動作である事は言うまでもない。

一人祭り状態で散々な痴態を晒した臯月ではあったが、それが功を奏したのか極限近かった緊張がかなりほぐれた様子で、どもる事も殺気のオーラを発する事もなく、ごく自然に挨拶が出来ていた。

全く何が幸いするか分からないものである。

「なんかガツチガチだなあ？ そんなお堅い挨拶じゃ、友達って感じしないじゃん！ あたしは羽田水月。好きに呼んでもらって構わないけど、必ず名前の方で呼ぶ事っ！ OK？ じゃ、宜しくね？ 臯月ちんっ」

水月が二カツと笑いながら臯月の挨拶に応える。

恐らく、臯月のオーラに対して腰を抜かしてしまった事を気に掛けているのだろう。

自分が一番に答えなければいけない。という想いがヒシヒシと皆に伝わってくる。

「うむ、私は武蔵野瑠夏だ。同じクラスでありながら、今更名乗るのも申し訳なく思う。」
これからは私と皐月はクラスメートであり、友達でもあるのだから宜しく頼む」

水月に続いて、瑠夏が軽く頭を下げた。

それに倣えと言わんばかりに、奈々もふんわりと微笑みながら自己紹介を始める。

「え〜と、蕪木奈々です。皐月ちゃんやんはちゃーはんさん好きですか？ 良ければ今度、ちゃーはんさんを巡る旅に出たりしませんか？ ちゃーはんさんに捧げるポエムとか創ってみたりしませんか？ あと、ちゃーは……………」

「ストップ！ 自己紹介なのか、炒飯教の洗脳セミナーなのか分からなくなってるぞっ!？」

奈々の口からほと走る危険なまでの炒飯愛に、暁斗が堪らず割って入る。

「そんなぁ…………酷いですよ暁斗くん。私がどれだけの愛着と敬意を表して『ちゃーはんさん』と呼び続けているのかを、一人でも多くの方に理解してもらいたいのに……………」

大きな瞳をウルウルさせて上目遣いで訴える奈々。

「うっ……………」

その顔に、不覚にも可愛いときめいてしまった暁斗。

そしてそれを敏感に察知して、装備している猫耳の位置を直す瑠夏。

「あ、え、えつと……じゃあ次！ 才ち担当の酢豚パナ男！」

「誰が才ち担当じゃいつ！ しかも、俺のフルネームが一字も合
つてないじゃないかよっ！！」

動揺した暁斗が慌てて慎一に振るが、どうやら空振りに終わったよ
うである。

ちなみに、誰も覚えていないかも知れないが、彼のフルネームは『

溝口慎一』

すでに役に立たない豆知識状態になっている事を記しておこう。

友達をつくらう！ 了

皐月は頬を赤らめながらその光景を眺めていた。

憧れ続けていた光景。

決して手が届かないと諦めていた光景。

皆が楽しそうに話をしながら、笑い合っている光景。

今迄は、この光景を遠くから一人眺めてるだけだった。

でも今は違う。

ずっとずっと夢見て憧れ続けていた光景の中に、自分が居る。

そして、自分の事を友達と呼んでくれる人達が居る。

皐月は瞳を綴じると、心地良い皆の笑い声を心に刻み付けた。

それからゆっくりと瞳を開き、にっこりと微笑む。

その笑顔は、皐月の生涯の中で一番輝いていた。

「おやおや、皐月ちゃん！ ナイススマイルではないですか！ やっぱ女の子はそうでなければいけませんな？」

水月が皐月の笑顔を見た瞬間に、グツと親指を起してウィンクをす

る。

「ひゃ、ひゃうう……」

照れた皐月が顔を真っ赤にして俯くが、その身体から殺気のオーラは出てくる事はなかった。

大切な仲間。

大切な友達。

皐月は俯きながらも幸福感が胸の奥から湧き出てきて、口元が無意識に弛んでしまう。

皐月はチラッと目だけを動かす。

その視線の先には談笑する暁斗の姿があった。

そう、自分を孤独の闇から引っ張り上げてくれた人。

誰もが怖がって逃げ出してしまっていた自分に、真っ正面から向き合ってくれた人。

そして……皐月に淡い恋心を刻み込んだ人。

皐月はようやく人生のスタートラインに立てた様な気がした。

「……うんっ！」

皐月は誰にも聞こえない様に小さく気合を入れると、教室の天井を仰いだ。

……ここからだ。

ここから私は変わる。

孤独に打ちのめされていた自分は今もういない。

歩き出そう。

皆よりも随分出遅れてしまったけれど、一歩一歩歩いて行こう。

暗闇だった私の心に光を差してくれた仲間達と……。

暇だしっ！

「ゲーセンに行きまっしょいっ！」

ある日の放課後、水月が唐突に切り出した提案に、帰り支度をしていた暁斗の手が止まる。

「ゲーセン？ 何で突然？」

「いやいや、せっかくの学生時代ですよ？ 青春真っ盛りなんですよ？ このまま直帰なんて全く持ってもつたいないではないですか！ 若さはち切れんばかりにGOでしょ？ 君のページに思い出刻んじやいなよって話ですよ」

暁斗の肩をバンバンと叩きながら熱く語る水月に、ああ……帰っても暇だから巻き込もうとしているんだな。と苦笑いを浮かべた。

「すまねえな水月。今日は姉貴に早く帰る様に言われてるんだわ」

由希奈をダシに逃れ様とする暁斗に、水月は頬を膨らませてあからさまに不満の意を見せる。

「かあ〜っ！ 姉貴ですか、シスターですか、おねーさまですか？ いつから暁斗君はそんなに懦弱になっちゃったんですか？ 思出しなさい！ あの、素手で魔王に立ち向かった日の事をつ！ あの時のギラギラした暁斗君は一体どこにいつてまっただんですか！ ? アンタ……光ってたぜ？」

もはや理解不能になってきている。

暁斗はかぶりを振ると、水月に向かって携帯電話を差し出す。

「分かった。じゃあ姉貴に電話して了解を得てみるよ？ OKならば付き合ってやる」

「まじスカ！？ ええ、電話しましょうとも！

外交界の異端児と呼ばれる水月ちゃんのをとくと見るが良いですよ！！」

この残念な娘に姉を説得出来る訳がない。

暁斗は由希奈の電話番号を入力すると、水月に電話を手渡した。

「どもども水月です。えっ、あ、はい！ ちょっとくらお願い事があったりなかったりする訳ですけども」

一生懸命対話している水月に、勝算我にありと言わんばかりにほくそ笑む暁斗。

やがて水月が電話から耳を離すと、スツと暁に携帯電話を差し出す。

「どうした？ 話は終わったのか？」

「ん〜……何かマイブラザーに代われって言われた」

携帯電話を水月から受け取ると、暁斗は繋がったままの電話を耳に宛てる。

「もしもし？」

「もしもし？ じゃないわよ愚弟っ！ この愚弟っ！！ 何がゲーセンよっ！ 今日は早く帰って来いって言ったでしょ？ 言ったわよね？」

何をあんたばっか遊ぶ段取りつけてんのよ！ 連れてけっ！ 私も連れてけばいいじゃないのさこの愚弟っっ！！！」

離れていても周囲に聞こえる程の大きななり声が矢継ぎ早に発され、暁斗は思わず通話口から耳を離れた。

「…………えっ？ つ、連れてけ？」

そんながり声の中に混じって聞こえた意外な言葉に、暁斗は言葉を返す。

愚弟という言葉には全く反応しない辺りが、この姉弟の関係の厳しさが伺える。

「とりあえず帰って来なさい！ それから愛しの姉を連れて出掛けたいけばいいじゃない！ じゃあね！ 待ってるから」

それを最後に通話を終了された暁斗は、茫然と目の前に立つ水月の方へ視線を移す。

「へっへっん！ キマリだね？」

Vサインを暁斗に押し付けながらニンマリと笑う水月。

「マジかよ…………」

水月と由希奈の思考を甘くみていた暁斗は、ガツクリと肩を落とすのであった。

暇だしっ！ 2

「えっ？ ゲームセンター……ゲームセンターですか？」

「そそっ、一緒にレッツラGOですよ」

物はついでにと、瑠夏と皐月を誘いにB組の教室へとやって来た暁斗と水月。

「ふおっ！？ ゲームセンターに行くお誘いだったんですか!？」

その横で、行き先も聞かされていないまま、半ば拉致状態で連行されて来た奈々が驚きの声を上げている。

「うむ、私は暁斗が行くと言うのならは何処へでも着いて行く所存だ。それが妻の役目だからな」

「……妻!」

腕を組み、賛同する瑠夏言葉に皐月がピクリと反応する。

「しかし暁斗。そんな所へわざわざ行くなんて、何か家具でも欲しいのか？」

「……瑠夏。ホームセンターじゃない、ゲームセンターだ」

思い切り勘違いをしている瑠夏に訂正をすると、瑠夏は何故かこの世の終わりの様な表情を浮かべた。

「ゲ、ゲ、ゲームセンターだっ!? お、お前はいつからそんな不良になってしまったんだ? ゲームセンターと言えば酒と煙草と喧嘩、加えて好色ではないのかっ!? 溜まり場ではないのかっ!」

「いつの時代のイメージなんだよそれ!」

どうも70年から80年代のイメージで語っている様子の瑠夏に、暁斗は現在の健全なイメージを説明する。

すると、瑠夏は半信半疑ながらも暁斗の説明に理解の色を示した。

「う、うむ。暁斗がそこまで言うのなら信じよう。それが嫁としての役目でもあるからな」

「……嫁!」

またもやピクリと反応する皐月。

「まあそんな訳で各自一度帰ってから現地にしゅーごーですよ! 帰りにそのまま行ってもいいんだけど、由希奈さんも来るって事なんです」

「御義姉様がつ!?!」

「暁斗君のお姉様がつ!?!」

水月の言葉に身を乗り出さん勢いで喰らい付く人物が二名。

瑠夏と皐月である。

「そうか、義姉様も来られるのか……。これは義妹として色々サポ
ートせねばなるまいな」

「あ、あ、暁斗君のお姉様が……。？ どうしよう……。ちゃんと御挨拶
できるかしら……。嫌われちゃったらどうしよう……。！ し、し、
失礼のない様にしなきゃ！ 頑張らなきゃ！」

ブツブツと考え事を始めた二人。

皐月に至っては何度も小さなガッツポーズをとっている有様である。

「え〜と、分かったかな？ いいかな？ 一度帰ってから現地集合
ね？ 何か質問ありますか？」

聞いているのか聞いていないのかわからない約二名に、顔を引きつら
せながら再度説明する水月。

そんな中、奈々がスツと挙手をした。

「はい！ 奈々ちゃん！」

ピシッと水月が指差すと、奈々は人差し指を顎に宛て、小首を傾げ
ながら口を開いた。

「ちゃーはんさんはおやつに入りますか？」

「入りません。あれはむしろ主食の方面です」

そんなやり取りを聞きながら、暁斗はこのメンバーに姉が加わって、本当に大丈夫なのかと不安に押しつぶされそうになっていた。

暇だしっ！ 3

「ところで、姉ちゃんゲームなんてやったっけ？」

出入口のドアに【本日休診】の札を掛けている由希奈の姿を眺めながら、暁斗は問う。

長い間離れて暮らしていたとはいえ、幼い頃に由希奈がゲームをしていたという記憶がない暁斗にとって、由希奈が今回一緒にゲームセンターに行きたがったのは予想外の出来事だった。

「ん〜？ 私を甘く見ない事ね。暁斗は知らないとは思っけど、私はゲームの全国大会で優勝した経験がある患者を診察した事もある程の逸材よ？ しかも、私自身もスライムを薬草使わずに倒せるくらい腕前を持っているわ」

「……それって、全然ゲームやった事ないのと同じじゃないか」

ムソツと偉そうに胸を張るポーズを取る由希奈ではあったが、暁斗の予想通りゲームに関してはド素人の様である。

ただ、仕事をしたくないので理由を付けて遊びたいだけなのだろう。

「医者としてどうなんだろう……」

我が姉ながら自由奔放な由希奈に、暁斗は苦笑いを浮かべて頬を掻く。

「いいから行くよ！ さあ、お姉ちゃんに着いて来なさいっ！」

小さい体を精一杯伸ばしながら、由希奈は大手を振って歩き出す。

……が、すぐに立ち止まると、怒りを露わにした眼を暁斗に向けた。

「……場所、どこよ？」

「えっ？ 行き先知らずに歩き出したの？」

何故かキレ気味の表情で振り返った由希奈に、暁斗は身の危険を感じて後退る。

そんな暁斗の懐に、由希奈は一瞬にして入り込んできた。

「知らないわよっ！ 言えよっ！ 場所くらい事前に言っときなさいよっ！ お姉ちゃん、昔から言ってたわよね？ 御利用は計画的につて！ つていうか何それ？ 計画的に出来なかったから金借りるハメになったんじゃないの！？ あと、よくコンビニとかで売ってるダンゴ！ 何あの、手作り風つて？ 風つて何よ！ 結局機械で作ったんでしょ？ 騙されないわよ私はっ！！」

「ちよっ！ 姉ちゃん近いっ！ しかも途中から別の話題になってる！」

意味不明の言葉を喚き散らしながら、怒涛の如く詰め寄ってくる由希奈に、暁斗は必死になって引き離そうとする。

いくら姉弟とはいえ、見てくれだけは一級品の由希奈が顔の目前ま

で迫ってくると、思わず赤面してしまう。

「わ、わかった！ わかったからっ！ ゴメンなさいっ！ 俺が全て悪いんです！」

背が低い由希奈ではあったが、暁斗のシャツの襟を掴み、力任せに引っ張られていたせいもあり、今にも唇がくっ付きそうな距離まで迫られた暁斗がついに白旗を上げる。

「うん、分かればいいのよ分かれば。それじゃお姉ちゃんをエスコートしなさい」

謝罪に満足したのか、由希奈は掴んでいた襟を離すと、ニッコリ微笑みながら暁斗の腕に自分の腕を絡ませた。

「えっ、ちよっ、姉ちゃん!？」

「いいからいいから。皆待ってるんでしょ？ じゃあ早く行かなきゃ」

突然の由希奈の行動に戸惑う暁斗だったが、やがてギクシャクしながらゲームセンターに向けて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5508x/>

つよきゃらっ！

2012年1月10日08時03分発行